２０２３／０６／０４　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：谷川の流れを慕う鹿のように
聖書箇所：詩篇４２～４３篇

テーマ：私たちがひどく落ち込むようなとき、どのようにして希望を見いだすか？

今から約二百年前となる１８２８年、ホレイショ・スパフォードという人物が生まれました。聡明な青年に成長したスパフォードは優秀な弁護士となり、その事業が軌道に乗った後には、アメリカ有数の大都市シカゴの北部を中心に不動産投資なども積極的に行っていました。また３３歳の時、妻のアンナと結婚した彼は、四人の娘とひとりの息子にも恵まれました。仕事も家庭も何もかもがうまくいっていました。神様にも熱心に仕えたその歩みは、すべてが順調に思われたのです。しかし、ある出来事をきっかけに事態は急転し始めて行きます。そのきっかけはひとり息子の死でした。４歳の息子を肺炎で失った彼は大きな悲しみを抱えることになります。またそんな彼に追い打ちをかけるように、その翌年、シカゴの街で大火災が発生しました。“シカゴ大火”とも呼ばれるこの大規模な火災はシカゴ北部の大部分を焼き尽くし、彼が投資していたものはすべて煙となってしまいました。スパフォードは息子と財産を一度に失うことになりました。全く想像もしていなかったひどい困難に突然彼は直面したのです。でも、これですべてが終わったわけではありませんでした。このような困難に遭ったスパフォードは、休養も兼ね、友人の牧師を支援しようとヨーロッパへ旅行する計画を立てました。家族も一緒に連れて行こうとロンドン行きの船を予約した彼は準備を終えて、出発の日を今か今かと待っていました。ところが出発の前日になって、どうしても外せない仕事が彼のもとへと舞い込んできます。そこで仕方なく彼は、次の船で行くからと妻と四人の娘に約束して、先に彼女たちを送り出しました。彼らを乗せた船は無事に港を出港しました。だれもその船が目的地に到着しないとは思いもしませんでした。しかし、大西洋横断中、船はほかの船に衝突して、ものの数十分で海底へと沈んでいくのです。悲しいことに、四人の娘はみな、亡くなってしまいました。妻は信じられないことにその状況から助け出され、生き延びることができました。そして、そんな彼女が夫に当てて一通の電報を送ったのです。そのメッセージは次のようなものでした。「私ひとりだけが助かった　私は何をしたらいいの」

さて皆さん、少し彼の立場に立って考えてみてください。あなたが彼の立場なら、この状況の中でどのように振る舞うでしょう？自分の愛する息子を病気で亡くし、自分の財産は燃えてなくなり、自分の計画も妨げられたばかりか、娘を全員事故で失ってしまうのです。またそれに加えて、助かった妻もひとり弱り果てていました。そんな状況を前にすれば、私たち自身も間違いなく大きな悲しみやショックを抱くでしょう。あまりの出来事に打ちのめされ、ただ涙するしかできないかもしれません。突然、暗闇の真っ只中に放り出されたかのように感じ、不安や恐れ絶望に陥ったり、自分の選択を後悔して自分を責め続けるかもしれません。またある人はその状況に対して怒りや憤りを覚えるかもしれませんし、すべてを諦めて、もしかしたら神様の力や知恵さえ疑うようになるかもしれません。このような悲劇を前にすれば、だれしもが悲しみに支配されて、喜びや希望を失って当然でしょう。もちろん妻からの一報を受けたスパフォードも目の前が真っ暗になりました。容易に想像できるように、ひどい悲しみを覚え打ちのめされたのです。でも同時に、その彼がこの後取った振る舞いは驚くべきものでした。妻からの一報を受けたスパフォードはすぐ次の船へと乗り込みます。そしてその道中、娘たちが亡くなった場所と同じ所を通り過ぎる時、彼は大きな悲しみとは別に、測り知れないほどの平安を覚え、次のようなことばを残しました。「しずけき河のきしべを過ぎゆくときにも　浮き悩みの荒波を渡りゆくおりにも心安し　神によりて安し」（讃美歌５２０）皆さんもよくご存じの讃美歌の歌詞のひとつでしょう。スパフォードは確かに涙を流していました。痛みや失意を心に深く負っていたのです。しかし、それでも

彼は神様のうちに平安を見出すことができました。荒れ狂う悲しみや失意の波が押し寄せるその中にあっても、ただ神様にあって慰めを見出すことができたのです。思い返せば、あのヨブもまさにそうでした。自分の愛する家族や財産を一度にすべて失った彼も、このように口にしていました。ヨブ１：２１に「**私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。【主】は与え、【主は】取られる。【主】の御名はほむべきかな。**」と。こうしてスパフォードにしてもヨブにしても、ひどい困難にあってなお、神様を諦めたり、怒りや疑いを抱くことはありませんでした。ただ、すべてのことが主の御手のうちにあるのだというその真理のうちに、彼らは希望を見出すことができたのです。

では、果たして私たちはそんな態度を取ることができるでしょうか？私たち自身もみな例外なく、いろんな困難や苦しみに直面することがあります。日々の生活の中にあって喜びや平安を奪うような出来事に直面することは多々あります。問題はもちろん人それぞれです。あるときはだれかからひどい扱いやことばを受けて悲しみを覚えるかもしれませんし、健康やからだの問題によって平安を失うこともあるでしょう。愛するものを失ったことで深い悲しみに心が奪われることもあれば、またあるときは具体的には何の理由もなくなぜか悲しいと、辛さを覚えることもあるでしょう。そんな場面に直面するとき、果たして私たちはどのようにして慰めを見出そうとするでしょうか？目の前が絶望にしか思えないようなとき、どのようにしてそこに希望を見出そうとするでしょうか？もちろん、みことばを愛しておられる皆さんは、そのような中にあっても、神様にただ信頼しようとされるでしょう。すばらしいことです。でも正直になれば、時に悲しみの中にある私たちは、そのように神様を見上げることにすら、難しさを覚えることもあるのです。果たしてどうすれば苦しみや酷い失意を覚えるその中にあって、変わらず神様のうちに慰めや希望を見出し続けることができるのでしょう？

感謝なことに、その答えをみことばは教えてくれています。コロサイが一段落したので、久しぶりに詩篇を一緒に見ていきたいと思いますが、これから私たちが見ていくこの詩篇の著者も、大きな困難の中に置かれていました。さまざまな悲しみや痛みを味わうその中にあって、その心は大きく嘆いていたのです。しかし、それでもなお変わらず、彼は神様に身をゆだね、その神様にあって希望を見出し続けて歩むことができました。いったいどうしてそのように歩むことができたのでしょう？きょうはそんな彼の歩みに注目して、皆さんと大切なことを一緒に学んでみたいと思います。

ただ具体的な内容に入っていく前に、まず二つのことを少し頭に入れておいてください。まず一つ目は、これから見ていく４２篇４３篇は、二つで一つのものとして扱うことができるということです。決して久しぶりに戻った詩篇で１５０篇まで早く終わらせようと私が勝手にまとめたのではありません。そうではなく、実際に多くの聖書註解者が、複数の理由からこれらがもともと一つのものであったのだというふうに考えていたりします。いったいどんな理由があるのか？例えば少し見ればすぐに気づくかと思いますが、４２篇の最初には、表題として“指揮者のために。コラの子たちのマスキール”というものがついています。しかし４３篇にはそれがついていません。そして、今全部は見ることはできませんが、４３篇以降を見ていけば、７１篇を除く第二巻のすべての詩篇に表題が付けられているのです。またそれに加えて、４２篇４３篇には同じ表現が何度も繰り返し使われてもいます。少し戻って４２：５を見るとこう書いていました。**「わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。」**と。５節にはこのようにありますが、これと同じものが１１節にも、また４３：５にも記されていました。ですからこれらの理由でもって、二つの詩篇は二つで一つのものとして考えることができるのです。

またもう一つ覚えていてほしいことというのは、この詩篇が「**マスキール**」だということです。「**マスキール**」という表現ですが、多くの聖書註解者は、このことばが「賢くする」とか「知恵や理解力を与える」という動詞“サカール”と関連していることから、「**マスキール**」というのが、「知恵」や「訓戒」を意味していると考えられているのです。つまり、これから私たちは、この詩篇の著者のいろいろ

な感情や悲しみや失意や葛藤・・そういったものを見ていくわけですが、それらのものはすべて私たちに必要な助けを与えてくれる重要な知恵だ、ということです。重要な教訓だ、ということです。著者は自らの体験を通して、苦しみや困難の中に置かれるようなそのとき、それに今の私たちがどのように応答したらよいのかを、実践的な知恵として示してくれているのです。ですから、このようにしてこの詩篇を見るときに、私たちが慰めや希望を必要とするような場合、ここに神様の知恵を見て取ることができるということです。では、そのような知恵とはいったいどんなものなのかを一緒に考えていきましょう。特に今回は絶望的に思える状況の中、主にあって希望を見出し続けた著者の歩みを、三つの場面に分けて考えてみたいと思います。どんな場面でどんな状況で彼は主に信頼し続けたのか、その歩みをよく考えてみましょう。まずはみことばを最初からお読みしますので、もう一度４２：１に戻ってそれぞれよく見てください。

詩篇４２篇

指揮者のために。コラの子たちのマスキール

「:1 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。

:2 私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。

:3 私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。人が一日中「おまえの神はどこにいるのか」と私に言う間。

:4 私はあの事などを思い起こし、私の前で心を注ぎ出しています。私があの群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭りを祝う群集とともに神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。

:5 わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。

:6 私の神よ。私のたましいは私の前でうなだれています。それゆえ、ヨルダンとヘルモンの地から、またミツァルの山から私はあなたを思い起こします。

:7 あなたの大滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こし、あなたの波、あなたの大波は、みな私の上を越えて行きました。

:8 昼には、【主】が恵みを施し、夜には、その歌が私とともにあります。私のいのち、神への、祈りが。

:9 私は、わが巌の神に申し上げます。「なぜ、あなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩くのですか。」

:10 私に敵対する者どもは、私の骨々が打ち砕かれるほど、私をそしり、一日中、「おまえの神はどこにいるのか」と私に言っています。

:11 わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。なぜ、私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の顔の救い、私の神を。」

詩篇４３篇

「:1 神よ。私のためにさばいてください。私の訴えを取り上げ、神を恐れない民の言い分を退けてください。欺きと不正の人から私を助け出してください。

:2 あなたは私の力の神であられるからです。なぜあなたは私を拒まれたのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩き回るのですか。

:3 どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かってそれらが、私を連れて行きますように。

:4 こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。

:5 わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。なぜ、私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の顔の救い、私の神を。」

〇絶望の中で見出した希望：苦しむ著者がおかれた三つの場面

１．悲しみにあふれる中にあって　１－５節

まず一つ目の場面は「悲しみにあふれる中にあって」です。著者は悲しみにあふれるその状況の中、神様に希望を見出して歩んでいました。４２篇はこのように始まっています。「**鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。**」「**鹿が谷川の流れを慕いあえぐように**」と。この始まりを読むとき、皆さんはどんな光景を思い浮かべるでしょう？私たちはきょう一緒に賛美もしましたが、もしかしたら多くの人たちはこのことばから、愛らしい鹿が、ある日静かな小川に水を求めてやって来るような、そんな美しい光景を思い浮かべているかもしれません。でも、実際にこのことばが意味していた状況というのは、それとはかけ離れたものでした。ここで登場する「**鹿**」は、そんな愛らしい姿でもなければ、「**谷川の流れ**」は、心地良く流れている水を表していたのでもなかったのです。ここで登場していた「**慕いあえぐ**」ということばは、聖書の中でここともう一箇所ヨエル書の中にしか出てきません。ヨエル書ではこのように用いられています。ヨエル１：２０にこう書いています。「 **野の獣も、あなたにあえぎ求めています。水の流れがかれ、火が荒野の牧草地を焼き尽くしたからです。**」と。これがこの箇所で著者が描いていた光景でもありました。火が牧草地を焼き尽くし、水の流れがかれてしまうような中にあって、必死に助けを求める野の生き物のように、鹿は飲み水を求めていました。どうしてそんなにも必死に水を求めていたのかは分かりません。長く続いた干ばつの後、弱り果てていたのかもしれませんし、猟師や猟犬に追われて逃げ続けたがゆえに疲れ切っていたのかもしれません。しかしどんな理由にせよ、鹿は今すぐに水を口にしなければ死んでしまうような切迫した状態にありました。谷川の流れを何よりも慕いあえいでいたのです。そしてそれと同じように、著者もこのとき「神様のことを自分は慕いあえいでいるのだ」と言うのです。彼はこう続けていました。１節の後半から見ていくと「**:1 …神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。:2 私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。**」ここで４回にわたって「**神**」ということばをくり返していました。それだけ彼は神様のことを必死に求めていたというわけです。鹿が水を飲まなければ今にも死んでしまうかのように、彼にとって神様はなくてはならない存在でした。ここで、彼があえて「**神を、生ける神を**」「**生ける神**」と口にしていたのも、彼はよくわかっていたからです。自分にとってのいのちが、ほかの何物でもないこの方のうちにしかないのだと。でも同時に、その彼はこのとき生ける神様と交わりを持つことができない状態にありました。彼は何らかのかたちで神様を礼拝する場所から引き離されていたのです。だから彼は「**いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。**」と言っていたのです。これは今の私たちからしてみると不思議に聞こえるかもしれません。…あれ？私たちはいつでも神様の御前に進み出ることができるんじゃないんですか？いつも神様は私とともにいてくださるんじゃないんですか？と。確かにその通りです。でも忘れてはいけないのは、このことばを記した著者は旧約の時代を生きている信仰者だったということです。そうすると思い返してみてください。この当時、イスラエルの人たちというのはみな、神様がご自身を現すと定められた場所—神殿に集まって礼拝をささげていました。人々は神殿に集まってきていけにえをささげ、ともに賛美し主をほめたたえたりしていたのです。礼拝の中心はいつも神殿にありました。でもこの著者は、今そこに出ることができませんでした。だからいのちである神様の前に、いつ再び出ることができるのかと慕いあえいでいたのです。その思いは当然軽いものではありませんでした。自分が何よりも望んでいることができない、そんな彼の心はひどく苦しんでいました。神様とともにいられないということを、彼は深く悲しんでいたのです。だから３節でこう述べていました。「**私の涙は、昼も夜も、私の食物でした。人が一日中「お前の神はどこにいるのか。」と私に言う間。**」著者は涙を流し続けていました。昼も夜も、一日中神様と交わることができないことを悲しんでいました。まるで神様が自分から遠く離れてしまったかのように感じ、孤独を覚えていました。そしてその結果、心は思い乱れてからだは弱り切って、食欲すら失せてしまったそんな

彼にとって、ただ涙だけが食べ物だったのです。またそんな悲痛にくれて弱り切っている彼に対して、周りの人たちも容赦のないひどいことばをかけていました。「いったいお前の神はどこにいるのか。苦しんでいるお前の助けはどこにあるのか。神様も見捨ててしまったのだ。そのような存在を信じているなんて、それは愚かな行為でしかない。」と。間違いなく彼は大きく傷ついていました。その心には深い悲しみや痛みがあふれていたのです。でも皆さん、彼に涙をもたらしたのはこれだけではありませんでした。彼は過去の楽しかった喜ばしい記憶を思い出して、それによってもさらに嘆いていたのです。４節にこう続いていました。「**私はあのことなどを思い起こし、私の前で心を注ぎ出しています。私があの群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭りを祝う群集とともに神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。**」と。ここで出てきていた「**心を注ぎ出しています**」ということばですが、これは比喩的な用法で、だれかが涙と深い落胆の中で、自分の心を主に注いで誠実に祈ったり、叫んだりする姿を表すのに用いられたりしました。ある人が深い悲しみの中で神様の前に叫ぶような、そんな姿を描くことばだったのです。例えば、子どもが全然与えられなかったあのハンナが、神様の前に激しく泣いて祈っていたときの姿をこれは表していました。ハンナが自分の口でこう言っていたのです。Ｉサムエル１：１５「**ハンナは答えて言った。いいえ、祭司さま。私は心に悩みのある女でございます。ぶどう酒も、お酒も飲んではおりません。私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです。**」ここで、著者がしていたことも同じでした。彼はかつて人々と一緒になって神の家、神殿へと歩いて行ったこと、皆で感謝にあふれて賛美しながら神様をほめたたえていたことなど、そんなすばらしい思い出を振り返っていたのです。神様のあわれみや恵みはなんとすばらしいものかと、皆とともに喜んでいた以前の姿が頭をよぎるのです。でもそんなときに、彼が今の状況に目を向けてみれば、そこからは遠く離れてしまった自分の姿を見るのです。こうして彼の悲しみはますます深まっていきました。自分の無力さや孤独を覚え、どうすることもできないその状況に心は渇ききり、からだも疲れ、そこにはただ涙がありました。彼はまさに悲しみのあふれる真っ只中にいたのです。こんな絶望的に思える状況の中で、果たして希望などを見出すことができるのでしょうか？

詩篇の著者は、それを見出すことができました。驚くことに彼は自分自身に向かってこのように語りかけるのです。よく５節を見てください。こう書いていました。「**わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。**」ここで皆さんに気づいてほしいことがあります。彼は確かに自分の感情に気づいていました。彼は、自分の心が困難な状況の中にあって落ち込んでいることも、思い乱れているということもわかっていました。彼は自分の思い、気持ち、そういったものを一切見ないようにただ蓋をしようとしたわけではありませんでした。でも、同時に彼は、そんな自分の感情に耳を傾けることもしていませんでした。自分の思いに心を奪われてもいませんでした。その代わりに、彼は自分自身に対して真理を直接語っていたのです。「わがたましいよ。なぜ、お前はうなだれているのか。なぜ私の前で思い乱れているのか」とそう自分に問いかけていました。「神様は私の希望じゃないのか？神様は私の喜びじゃないのか？そうだとしたら神を待ち望め」と、揺るぐことのない真理を自分が自分自身に思い出させていたのです。間違いなく今見てきたように著者は失望の中にいました。落胆を覚え、心は騒ぎ悲しみにあふれていたその状況にあって、自分自身の感情に支配されるということは、もうとっても容易なことだったでしょう。でも、たとえ先の見えない暗闇の中にあろうと、彼は神様に目を向け、そして自分の心にまっすぐに語りかけるのです。自分自身の心で、自分に救いを与えてくださるその神様をほめたたえるのだと、自分で心に決めていたのです。

そして、このような姿というのは、今の私たちにとっても見倣うべき大切な模範です。少し自分の歩みを振り返って考えてみましょう。私たちが困難や苦しみに直面して、悲しみや失意・・いろんな感情を覚えるときに、果たして私たちは、自分の心に真理を語っているでしょうか？自分の心に神様の姿を

思い出させようとしているでしょうか？それとも、自分の思いや感情にいつも心を奪われて、それに揺り動かされ続けているでしょうか？かつて、この点に関してロイド・ジョーンズ氏は、自身の著書「霊的スランプ」の中で次のように述べていました。『人生における悲しみのほとんどは、自己が語る代わりに自己に聞き従っているという事実に起因していると気付いたことがありますか？…この詩篇の作者の対処法はどうでしょう。彼は自己が語るのを許さず、彼の方から自己に語りかけ始めています。「わがたましいよ。なぜ、お前は絶望しているのか」と問いかけるのです。彼のたましいは彼を憂鬱にさせ、押しつぶそうとしていました。そこで彼はきっぱりと「自己よ、しばらく耳を傾けよ。私がお前に語るから」と宣言するのです。私の言っている意味がわかりますか？』と。もし、私たちが恐れや不安や失望に心奪われそうになるのであれば、その時にこそ私たちは自分自身に語る必要があります。真理を思い出させる必要があります。「自分には何が起きているのかわからない…でも、私の主はすべてのことをご存じでいてくださる。自分には全く手に負えない…でも、私の主はすべてのことを支配してくださっている、自分はもうどうしようもない愚かな罪人だ…でも、私の主はこんな私のことでさえ、ただ恵みによって信仰によってキリストによって救ってくださった。」と、このようにして私たちは主を見上げて、主のみことばの真理と約束に思いを巡らせようとするのです。自分が感じていることの前に白旗を振って降伏するのではなく、自分の知っていることに固くすがりつくことです。ですから、自分のこととして一度よく考えてみてください。果たしてあなたが困難に直面するようなときにあなたが拠り所としているのは、自分自身がどのように感じるかでしょうか？それとも、みことばが何を言っているかでしょうか？ある意味、自分の感情に耳を傾けるというのはもう容易なことです。むしろ、私たちはすぐに自分の思いや考えに自然に引っ張られていってしまうことの方が多いでしょう。でもだからこそ、悲しみや失意の中に置かれるようなときこそ、自分に真理を語り続けることです。神様がいったいどんなお方なのか、いったい何を成し遂げられて、これからいったい何を成すと約束されているのか、その偉大な姿を思い出し続けることです。詩篇の著者は悲しみにあふれる中で、神様を待ち望んでそこに希望を見出すことができました。彼は自分に語っていました。今の私たちも同じように、この主にあって揺るがぬ希望を見出すことができます。これが一つ目の場面でした。

２．試練の波にもまれる中にあって　６－１１節

続けて二つ目の場面を６－１１節に見て取ることができます。二つ目の場面は「試練の波にもまれる中にあって」です。著者は、激しい試練の波にもまれるそんな状況の中、神様に希望を見出して歩んでいました。このように６節は記されていました。「**私の神よ。私のたましいは私の前でうなだれています。それゆえ、ヨルダンとヘルモンの地から、またミツァルの山から私はあなたを思い起こします。**」と。最初のことばを聞いて…えっ！さっき著者は、「神を待ち望め」と言い聞かせたんじゃないんですか？そこに慰めを見出して問題はもう解決したんじゃないんですか？と思った方があるかもしれません。いいえ、そうではありません。問題がすぐに消え失せたわけではなかったのです。確かに苦しい状況の中にあって、彼は主を見上げてそこに希望を見出しました。でも同時に彼のうちには相変わらず葛藤が存在していたのです。彼の心は喜びで上向きになったかと思えば、続けて悲しみによって下を向くこともありました。そんな彼の状態は私たちもよくわかりますね。こうして彼は自身の抱えている難しさというものを神様に正直に打ち明けたのです。「私の神よ。私のたましいはうなだれています。」と。

またここで、彼は自分の置かれていた地理的な場所についても触れていました。皆さんのレジメにも載せておきましたが、ここで登場している「**ヨルダン**」や「**ヘルモンの地**」というのは、イスラエルの北東部、シリアとの国境周辺の地域のことを表しています。また「**ミツァルの山**」に関しては詳しいことはわかっていませんが、その辺りにあるヘルモン山の一部ではないかと言う人もあります。それがどこであれ、ここでのポイントは、彼のいた場所が神殿のあるエルサレムから遥か遠くに離れていたということです。地理的にも離れていたのです。だから、彼は神様からかけ離れたかのように感じていました。

神殿のある場所に帰りたい、生ける神様の御前に再び出たいと、そのように彼のたましいは渇いていたのです。

　でも、彼の抱えていた苦しみはそれだけではありませんでした。７節にこう続いていきます。「**あなたの大滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こし、あなたの波、あなたの大波は、みな私の上を越えて行きました。**」著者はいったい何を言わんとしたのでしょう？彼はここで詩的な表現を用いていました。それによって、自分自身の感情の浮き沈みや苦しみや数々の試練というものを描こうとしたのです。まるで、声を出して助けを叫び求めたとしても、流れ落ちる大滝のごう音にかき消されてしまうかのように、まるで、荒れ狂う波がどんどんどんどん押し寄せてきて、次から次へと大波が襲いかかって来るように、彼は試練の波というものによって押しつぶされそうになっていました。波がどんどん打ちつけるから、立っていることもできず、苦しみの中に陥って溺れそうになっていました。周りに助けを求めることもできず、孤独を覚えていた彼は、苦難の渦の中に巻き込まれて、ただひとり嘆いていたのです。肉体的にも精神的にもひどい苦痛を味わっていたことでしょう。まさに絶望的な状況にあったのです。でも、そんな状況の中で彼が覚えていたことというのは驚くべきものでした。もう一度７節をよく見ると、こう言っていますね。「**あなたの大滝のとどろきに**」「**あなたの波**」「**あなたの大波は**」と。「**あなた**」「**あなた**」「**あなた**」と。これを言い換えれば、著者は自分が経験しているすべてのこと、たとえそれが押し寄せてくる困難や苦しみであったとしてもそれはすべて神様からのものである、とそう理解していたということです。彼は試練の波にもまれているその真っ只中にあったとしても、起こっている事は例外なく神様の支配のもとで起きていることなのだ、ということを忘れることはなかったのです。やはり彼は、どんな状況にあったとしても、自分が信頼するその神様に、ただ目を向けようとしていました。だから続けてこうも述べていくのです。「**:8 昼には、【主】が恵みを施し、夜には、その歌が私とともにあります。私のいのち、神への、祈りが。:9 私は、わが巌の神に申し上げます。**」と。彼は、自分の神様がただすべてのことを支配されている主権者だ、と覚えていただけではありません。この方が恵みに富んでいて、いつも約束に忠実で、あわれみを示してくださるそんな主なのだ、ということもわかっていました。またこの方が同じように、自分にとっての守りであり、避け所である巌なのだ、ということも心から確信していました。だからこそ、いろんな苦しみや痛みが実際にある中で、彼はそんな偉大な神様がともにいてくださるというその事実に慰めを見出すことができたのです。確かにひどい苦痛を味わったとしても、それにまさる神様の恵みに希望を見出すことができました。でも同時にそのようにして神様の姿を正しく覚えていた彼というのは、素直でした。神様の偉大さというものを覚えていたからこそ、正直な疑問を口にしたのです。９節の後半に書いていました。「**:9…「なぜ、あなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩くのですか。:10 私に敵対する者どもは、私の骨々が打ち砕かれるほど、私をそしり、一日中、「おまえの神はどこにいるのか」と私に言っています。**」と。著者は変わらず彼を敵対する者から虐げられていました。３節にもあったように、彼を憎む者たちは変わらず、いったいお前の神はどこにいるのか、どこに助けがあるんだ、苦しむお前のことなどもう神様は見捨ててしまったに違いない。」と責め立て続けていたのです。そんな攻撃によって彼はひどく苦しんでいました。そのようにして受けた苦しみ痛みというものは、まるでからだの骨々が打ち砕かれるほどの大きなものでした。骨々が全部打ち砕かれるほどの痛みを味わった事は私たちにはありません。でもこの著者はそれだけ痛みを覚えていたのです。こうして彼はまさにひどい試練に直面していました。神様を見上げてそのすばらしいご性質に目を向けながらも、さまざまな落胆や不安やいろんな感情というものがその心には渦巻いていたのです。私たちもそのような様子はよくわかりますね。

　では、そのような状況にあった詩篇の著者はいったいどのように振る舞ったのでしょう？１１節にこう書いていました。「**わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。なぜ、私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の顔の救い。私の神よ。**」と。彼がしていたことは、

同じでした。自分の感情に耳を傾けたのではありません。置かれた状況に心を奪われたのでもありません。彼は繰り返し、繰り返し自分のたましいに向かって真理を語り続けていました。「**神を待ち望め。**」「**私はなおもほめたたえる。**」とそう自分に言い聞かせ続けていたのです。彼の焦点はやはり、自分がどう感じるのかではなくて、自分が知っているお方にありました。

もちろん、これは今の私たちにとっても同じく大切なことです。確かに試練や苦しみの波が私たちに押し寄せてくれば、私たちは時にその大きな波によって視界を奪われて、恵みやあわれみ、神様のご計画、そういったものを見出せなくなって不安に感じることがあります。私たちは自分が見えなければ、自分が感じなければ、神様は働いておられないと考えてしまうことがあります。でもそんな時こそ、自分に言い聞かせることです。この世界を造られた神様は、今も変わらずに働いておられます。すべてのことを変わらずに支配しておられます。私たちの理解を遥かに超えた知恵にあふれたその方は、ただご自身の栄光のために、いつも変わらず、昔も今もこれから先も必ずご自身の目的を成し遂げ続けられるのです。イザヤ４６：９－１０はこう言っていました。「**:9 遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。:10 わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う。**」だから皆さん、私たちは覚えていないといけません。私たちが感じるから、そのとき神様が働いているのではありません。私たちが見るから、だからそのときだけ神様が働いているのではありません。神様は働き続けておられるのです。その偉大な神様の姿に心を留めることです。その偉大な神様の姿をみことばから知って、その真理に思いを留め続けることです。変わってしまう状況や、すぐに揺らいでしまうそんな感情ではなくて、変わらない真理を自分自身に語り、その真理にただ心を支配させ続けることです。皆さん、その責任はだれにあると思います？だれが自分の心に語ると思います？あなたがそれをするのです。詩篇の著者はそのようにして、試練の波にもまれる中で神様を待ち望んでいました。自分に真理を言い聞かせ続けて、そこに希望を見出すことができました。今の私たちも同じです。この主にあって私たちも揺るがぬ希望を見出すことができるのです。これが二つ目の場面でした。

３．敵に囲まれる中にあって　４３：１－５節

そして最後もう一つの場面が４３篇に出てきます。三つ目の場面は「敵に囲まれる中にあって」です。著者は神様を恐れないそんな敵に囲まれている状況にあってなお、神様に希望を見出して歩んでいました。４３篇はこのように始まっていました。「**神よ。私のためにさばいてください。私の訴えを取り上げ、神を恐れない民の言い分を退けてください。欺きと不正の人から私を助け出してください。**」著者は変わらず、彼を憎む者たちの手によって苦しめられていました。神様を愛そうともしないそんな民たちから不当な扱いを受けて、ありもしないことで訴えられていると感じていました。だから彼は神様に向かって「どうすることもできない無力な自分を省みてください、助け出してください。」と素直に願ったのです。でも、そんな祈りをささげた彼は、大きな葛藤も同時に抱いていました。このように続くのです。２節「**あなたは私の力の神であられるからです。なぜあなたは私を拒まれたのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩き回るのですか。**」と。同じパターンが見えますね。彼は、神様こそ自分の力なのだと、心から確信していました。でも、どういうわけか力あるその神様が働いてくださらないのです。すべてをご自分の意のままにできるはずなのに、すべてをご存じのはずなのに、まさに今困っているその自分の状況を省みて助けの手を差し伸べてくださらないのです。だから彼は混乱していました。「なぜ私を拒むのですか。」と。「どうして私は敵のしいたげを受けるその中にあって、嘆いて歩き回っているのですか。」と。間違いなく彼は失意の中にいました。偽りを口にする多くの敵たちによって大きく傷つけられ、また同時に、信頼しているその神様にも見捨てられたかのように感じていました。今、自分に最も必要な神様がどこか遠く離れてしまったかのように思えて、孤独や恐れ、落胆すら覚えていたことでしょう。

では、そんな苦しい状況の中にあって、彼はいったいどのように振る舞ったのでしょう？彼がしたこと、それは変わらず神様に祈りをささげ、その導きを求めることでした。３、４節にこうあります。「**:3 どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かってそれらが、私を連れて行きますように。:4 こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。**」と。このように、彼は決して神様から目をそらすことはありませんでした。そして何よりこの詩篇の初めからずっと彼が願っていたように、彼は自分が最も喜びとする神様の御前に行きたい、そして再びそこで神様をほめたたえたい、とその日を期待していたのです。そのことを祈っていたのです。でも、その日がすぐに来たわけではなかったでしょう。この祈りをささげていたときも、置かれた状況が急に変わったわけではなかったのです。彼の周りには変わらず敵はいたし、彼の心はいろんな葛藤を覚えていました。だから、主にあって希望を抱いていた彼は、最後にもう一度繰り返していました。５節「**わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。なぜ、私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の顔の救い、私の神を。**」皆さん、これが、苦しみやひどい失意を覚える中にあって、変わらず慰めや希望を見出し続けるための鍵でした。私たちはたとえどんなときも、ほかのだれでもない神様のうちに希望を見出し続けることができるのです。詩篇の著者は、間違いなくひどい苦しみや痛みを覚えていました。また、どうして私を忘れてしまったのですか、どうして私を拒むのですか、とそのように疑問を覚えることもありました。でも、そんな彼は自分の置かれた状況に揺り動かされるのではなく、自分の抱いているその感情に心を奪われるのでもなく、ただ自分に真理を語り続けていたのです。そしてその真理のうちに、いや何より、いのちであって、救いであって、力であって、恵みであって、厳である、そんな変わらない神様のうちに変わらない喜びを見出すことができました。私たちも同じです。問われるのは、私たちが、だれに、希望を置くのかです。私たちが、だれを、自分自身に語り続けるのかです。この詩篇の著者も、ヨブも、またスパフォードもみんな同じ方に目を留めて、そしてそこに喜びと慰めを見出していました。すべてを神様にゆだねていたからこそ、あれほどの悲劇に直面してもなお、「しずけき河のきしべを過ぎゆくときにも　浮き悩みの荒波を渡りゆくおりにも　心安し　神によりて安し」とそう口にすることができました。

そうだとするなら、私たちもこの方を見上げることです。もし、まだこの神様を知っていないのであれば、そんなあなたは、この方にある希望というものを今持っていないだけではありません。あなたは永遠に続く希望をも持っていません。そしてみことばははっきりと、私やあなたを造ってくださったその創造主を愛するのではなく、この方に従わずに生きていることを「罪だ」と教えています。そして、その罪のゆえに、必ず、義なる正しい神様がさばきを与えること、永遠の滅びを与えることが約束されているのです。でも、あなたも希望を手にすることができます。イエス・キリストを自分自身の救い主として、主として受け入れてください。自分には何もなくて、その方のもとに出て、この方にすべてをゆだねて生きて行ってください。そこに、この希望があります。あなたもこの希望を手にして歩んでください。また、もうすでに救われて神様を愛して歩んでいる皆さん、「なぜ、お前はうなだれているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。」とそう自分自身に真理を語り続けることです。私たちの変わらない希望は神様にあります。この方に信頼して、そして続けて歩んでいきましょう。